

# 高収益が期待されるキュウリの少量培地栽培法

福島県農業総合センター 作物園芸部 野菜科

部門名 野菜—キュウリ—作型・栽培型

担当者 横田祐未・小林智之・吉田佳充

## I 新技術の解説

### 1 要旨

4月上旬に定植するキュウリの少量培地の養液栽培は、側枝つる下ろし栽培で5月～7月下旬までの収穫期間で10t/10a以上の収量が得られる(図1)。

- (1) 少量培地栽培では、主枝を18節程度で摘芯し、収穫枝を、主枝と残した一次側枝のみとすることで約80果以上/株の収穫果が得られる(図2)。
- (2) 4月上旬定植における、1a(114株)当たりの可販果収量は、側枝4本仕立つる下ろし栽培で1,262kg/aである(図2)。
- (3) 4月上旬定植の場合、年あたりの資材費は80千円/a、所得は145千円/aである(表1)。

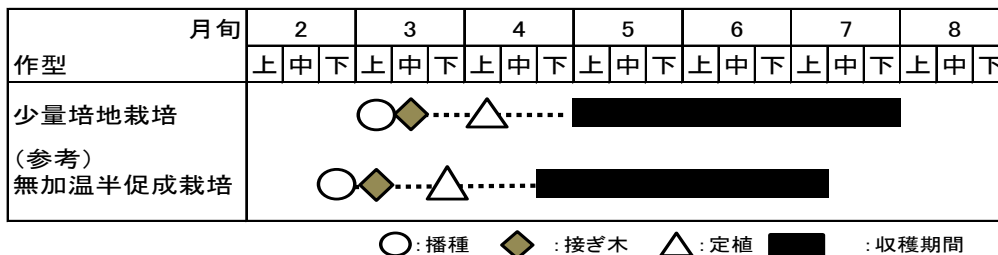


図1 キュウリ少量培地栽培 栽培暦

### 2 期待される効果

- (1) 収穫期間3ヶ月で10t/10a以上の収量が得られる。
- (2) センチュウ類やホモブシス根腐病などの土壌病害虫の影響を受けずに栽培できる。
- (3) ほ場を耕起せずに簡易な資材を用いてキュウリの少量培地栽培が可能である。
- (4) 誘引や葉かき作業が単純なため、新規導入しやすい整枝管理技術である。

### 3 適用範囲

県内全域

### 4 普及上の留意点

- (1) 栽培用プランター(長さ100×幅30×深12cm)にバーミキュライトとピートモスを等量混合した培地を30L充填し、プランターあたり2株定植する。施肥は、EC管理をしながら10cm間隔の点滴かん水チューブを株の両側に設置するかん水同時施肥で行い、給液は生育時の生育や天候に併せて実施する。
- (2) 遮光資材、白色マルチを用いて高温対策を行う。
- (3) キュウリ根の侵入による点滴かん水チューブの目詰まり防止のため、点滴孔は上向きに設置する。

## II 具体的データ等

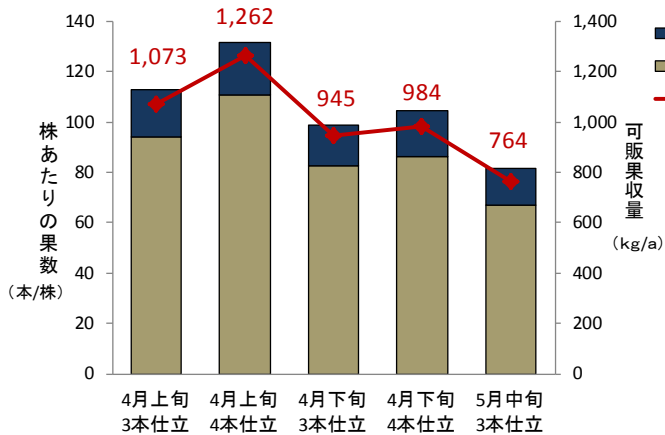


図2 キュウリの定植時期と仕立て本数の違いが収量に及ぼす影響 (2018年)

\* 可販果収量は、114株/a、100g/本で算出した

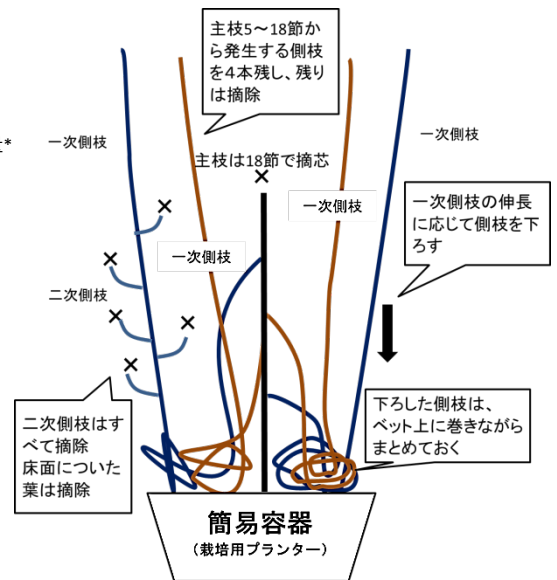


図3 少量培地栽培模式図

表1 所得の試算(1a 114株あたり)(2018年)

項目	金額(円)
収量(kg/a)	1,262
単価(円/kg) <sup>z</sup>	266
粗収入(円/a)	335,692
資材費 <sup>y</sup>	80,152
種苗費	21,660
農薬費	5,697
諸材料費	1,163
流通経費 <sup>x</sup>	81,445
所得(円)	145,575

<sup>x</sup> JAへの個選による出荷を想定

<sup>y</sup> 1年当たりの費用は各資材の耐用年数より算出  
<sup>z</sup> JA全農福島における平成26年から29年の5月上旬から7月下旬までの平均単価

Figure 4 shows the cultivation management points for cucumbers in a small-scale cultivation mode. The photos illustrate the plants in the cultivation bed.

**<茎葉管理>**

- ① 床面についた枝の摘葉をする(枝当たり1回につき1~2枚)
- ② つる下ろし後に栽培ベッド下に落ちた枝をベッド上に乗せる(キュウリの枝は柔軟性があり、巻いて一箇所にまとめる)

**<水管理>**

培土が少なく、乾きやすいため少量多回数のかん水を基本とする。最盛期は30分~1時間おきに灌水する

**<肥培管理値>** 単位: ms/cm

	定植後	摘心前後	側枝収穫開始
EC変更時期	1.0	1.5	1.8~2.0

**<摘果>**

不良果実を早めに摘果することで株の負担を減らす

図4 栽培管理のポイント

## III その他

### 1 執筆者

横田 祐未

### 2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成 27 年度~30 年度
- (2) 研究課題名 主要野菜の安定生産技術の確立 (きゅうりの少量培地栽培の確立)

### 3 主な参考文献・資料

- (1) 東出忠桐ら (2012)、収量構成要素の解析からみたキュウリ短期栽培の摘心およびつる下ろし整枝法の差異、園芸学研 11 (4)
- (2) 小林智之 (2017)、簡易な資材を用いたキュウリの少量培地栽培、参考となる成果